

風土



齒に残る泥鰯の丸よ母死なせて

（句集『竹取』より昭和三十六年作）

桂郎師は昭和三十六年の七月に母・キヨを七六歳で失っています。キヨは理髪師をやりながら俳句に打ち込む若き桂郎師に協力的だったと年譜にあります。この泥鰯は母との思い出に繋がるものでしょう。「泥鰯の丸」が齒に残るといふ細やかな感覚は、斎藤茂吉の歌で、母の死を「のど赤き玄鳥」で受け止める感覚と通底するものがあります。

土間に甘藷乾く有線電話借る

（句集『竹取』より昭和三十六年作）

鶴川村での作です。この時代の農家は、保存が効きお腹を満たせる甘藷をどこでも作っていました。それを土間に広げてあるのです。さて「有線電話借る」とありますので、桂郎師の書齋兼「風土」編集室には電話を置いてないことがわかります。編集上の急用かもしれません。近所の裕福な農家に電話を借りにいったのです。所せましと転がっている土間の甘藷を踏まぬよう踏まぬよう。

下駄をはくときの男や初嵐

(句集『能ヶ谷』より昭和五十六年作)

「初嵐」は七月末から八月にかけて吹く風を呼びます。嵐というより秋を知らせる少し強い風です。この句は「男や」とここに詠嘆を入れています。「下駄をはくとき」というのは、仕事を終え、くつろいだ気持ちで庭や近所を散策しようとする時なのです。開放され、素に戻った男に「初嵐」の心地よいことよ。独特の叙法が魅力的な作品です。

鳥帰るうつらうつらと大櫓

(句集『能ヶ谷』より昭和五十六年作)

この句は器師の「いのちふたつ」の俳句観をよく表しています。それが「うつらうつら」です。まず「大櫓」の新芽が霧がかかったように枝を包みこんでいる様子を「うつらうつら」と踏み込み、さらに陽春の霞がかかった空の彼方へ消えゆく「帰る鳥」が、「大櫓」の「うつらうつら」を深めているのです。

ひばり野

南うみを

鱚 来よ川底の石均しては

鱚 築仕上げは大き石で圧す

日翳るや水のゆらりと鱚になる

活いさざ噛むやほのかに藻の匂ふ

襲はれし羽根蘆牙にちらばれる

荒草の春のあられを撥ねどほし
さへづりの始まつてきし雫かな
をさなさの立子のつくし摘みにけり

郷里の父母の墓移転

ひばり野の端に坐らせて貰ふ

桜島おぼろに遠し骨移し

大干潟牛で貝鋤く父なるぞ

蒔ほほけ母が爪切る裁ち鋏



竹間集

同人作品



十一日

間島あきら

十一日の水の平らか花大根
水影の水影を追ふ彼岸かな
糸んどうの花噴き出せる藁囲ひ
畦焼の煙を割つて人影来
雉子鳴いて雲間の日差し引き出せり
拾い読む賢治の詩集花辛夷
春の鶴水輪一つに消えにけり

二月尽

宮川みね子

臘梅に朝の日ざしのゆきわたる
ほのぼのと仔犬よりくる鳥曇
しづかなる一人暮しの余寒かな
焼きたてのパン買ひにゆく冬帽子
亡夫に問ひたきことあり彼岸寒
ひと文字のおもさを思ふ二月尽
音たてて雨通り過ぐ彼岸かな

常神岬

浜 福恵

常神へ梅散りかかる塩坂しやくくし越みち
テトラポットに居並ぶ岬の春鷗
二羽の鷗が鳶追ひ払ふ日永かな
門口は日向三味 鱧干す
鱧干す脇に合羽も長靴も
休む間の若布を濯ぐ水の音
常神や神子や畏こみ山桜

彼岸寒

門伝 史会

春浅しからくり時計に唐子跳ね
十四代陶芸家 人前園宝今泉今右衛門雛の前
天領と今に伝へて山笑ふ
青き踏む寺に花塚茶筌塚
黄水仙咲くや陶工無縁塔
鳥帰る拾へば貝の砂こぼれ
彼岸寒子規読みし句の口に出て

「老樹」以後(三十八)

野沢しの武

二度と来ぬ桜の幹を叩き去る
魁けてわが家の辛夷咲きたるや
故郷の山高からず冷奴
入所者の子もみな大人子供の日
ガリガリと飴嚙む癖のまま五月
老農夫ひとり遅れて植田去る
昭和の日ホームに朝のパンツ干す

山笑ふ

鈴木 石花

紅梅を過ぎ白梅に野点傘
三月三日昭和三十三年結ばれし
S L の下り満席入彼岸
赤城越え祖母生れし家かぎろへり
十度目の住所変更山笑ふ
剪定す男子生れたる記念の樹
アツプリケの花模様足す春シヨール

水温む

川田 暢子

水温む顔を洗ひてよろめけり
春障子日の暮るるまで開けてをく
蒲公英の殖えて数ふること忘る
雲雀ひばり「お父さんはもういませんよ」
蝶々になりたし蝶のお供する
春愁や水際のいつも立つところ
悲しみと一緒に分けて夏みかん

山河集

同人作品



南うみを選

航跡をよぎる航跡うららけし

内藤 静

竜天に登りし後の乱気流
ぎんいろの雲薄墨の花辛夷
にはとりの搔く蹲る春の土
陽炎へるもの銅の牛の鼻

太閤も昔針売り山笑ふ

豎山 道助

春動く二つに分かれ遠き雲
のどけしや身重の妻と将棋指す
春の土踏みつつ節記念館
啄木の多喜二の小樽鳥帰る

佐藤やすこ

迫り来る八百体の座敷雛
洋装の内裏雛とや格天井
永き日や糸瓜瓢箪縁側へ

子規の庭両手に余る露の臺
鈴の音は春の野山へ三番叟

チューリップ一〇一番の立見席
春一番女優の丸き伊達眼鏡

中嶋 陽子

さるぼぼのしがみつきたる吊し雛
ボール紙の舟滑り来る春の山
寄せ書きの色紙を回す蝶の昼

聞きつけて人の増えぬし梅の茶屋
おはなしの続きの戻る雛の間

上辻 蒼人

春寒や宇陀の月斗の忌に招れ
春泥の靴を並べて月斗の忌
弥生の日差し込んでゐる天袋

風土独語／南 うみを



竜天に登りし後の乱気流

内藤 静

「竜春分にして天に登り、秋分にして淵に潜む」にちなんだ季語で、このころ雷などが活発になります。「乱気流」はまるで竜が天を掻き乱したために起こったかのようです。ダイナミックです。

墓 隠す 煙 襖 や 大 石 忌

奥田 茶々

大石内蔵助が主君仇討の企てを幕府に覚られぬため、山科に住み、夜ごと一力茶屋で遊びほうけたのは有名です。この「煙襖」は大石内蔵助のその心を隠すかのように想像が広がります。

四股踏んで玄関を出る大試験

豎山 道助

「大試験」は進路を決める大事な試験です。目いっぱい勉強し、丹田に力を入れるために「四股踏んで」出発です。意欲がみなぎった作品です。

迫り来る八百体の座敷雛

佐藤やすこ

この「座敷雛」は使わなくなった雛をひとところに集めて段飾りにしたものです。所狭しと積まれた雛人形のあまたの眼に圧倒され、恐ろしささえ感じているのです。

鳥雲にペリーの日本遠征記

落合 絹代

ペリーの突然の来航で、日本は近代化に目覚めました。今太平洋を渡り、北へ鳥が帰っていきます。海の広さと歴史が「鳥雲に」とひびき合っています。

さるぼぼのしがみつきたる吊るし雛

中嶋 陽子

「さるぼぼ」は赤い布で作り、中に綿を詰めた人形で、幼児の四つ這いの姿に似せて幼児のお守りとする、岐阜高山の郷土玩具です。作者は、雛と共に逆さに吊られた「さるぼぼ」を「しがみつきたる」と見ました。健やかな成長を願わんがため。

百点より百パーセントさくら咲く

雨宮 桂子

「百点より百パーセント」は力を出し切る満開の桜とも、作者の厳しい決意とも読めます。いずれにせよ並々ならぬものを感じます。一步二歩踏みしめながら前進する「心性」が伝わります。

春泥の靴を並べて月斗の忌

上辻 蒼人

青木月斗は正岡子規の弟で、子規に「西の俳諧奉行」と信頼されました。「月斗の忌」は三月十七日です。作者は奈良の山間ですので、忌を修するために「春泥」を馳せ参じたのです。豪放磊落な月斗に合う「春泥の靴」たちです。(以下略)

風土集



南うみを選

白木蓮大きな息を空に吐く 東京 奥田 茶々

墓隠す煙襖や大石忌

調律の音又ラの音春の風

薄紙を重ねる貼り絵さくら東風

徳利に短く挿して桃の花

囀りや少女に高き懺悔台

鈍行に開く駅弁啄木忌

漱石の墓に人待つ彼岸寒

物芽出づ匿名で書くミステリー

四股踏んで玄関を出る大試験

保存樹に通し番号鳥帰る

花の雲垂れて靖国神社かな

菜の咲いて淵のむかうに昭和展

山並の青く潤みて入彼岸

ドリブルをしながら帰る花薔

川崎

内藤 静

川崎

豎山道助

鳥雲にペリーの日本遠征記 大和 落合 絹代

南風やどつと人吐く豪華船

艦綱のこつんこつんと春の潮

もうそこに傘寿来てをり水温む

髪を切る鏡と会話桃の花

初蝶や浮き足立ちて甲斐の山

百点より百パーセントさくら咲く

卒園の児の口もとがきゆつとなる

土塊のころころ遊ぶ春日かな

木蓮に夢のかけらのありし日よ

犬吠の春を虚子の句春夫の詩

遠足の子の囲みたる蛇口かな

割箸を掴みて座る花見莫塵

あきらかに父の息なりゴム風船

ふらここを待つあと一人あと一人

水戸

山田 健太

福生

雨宮 桂子